

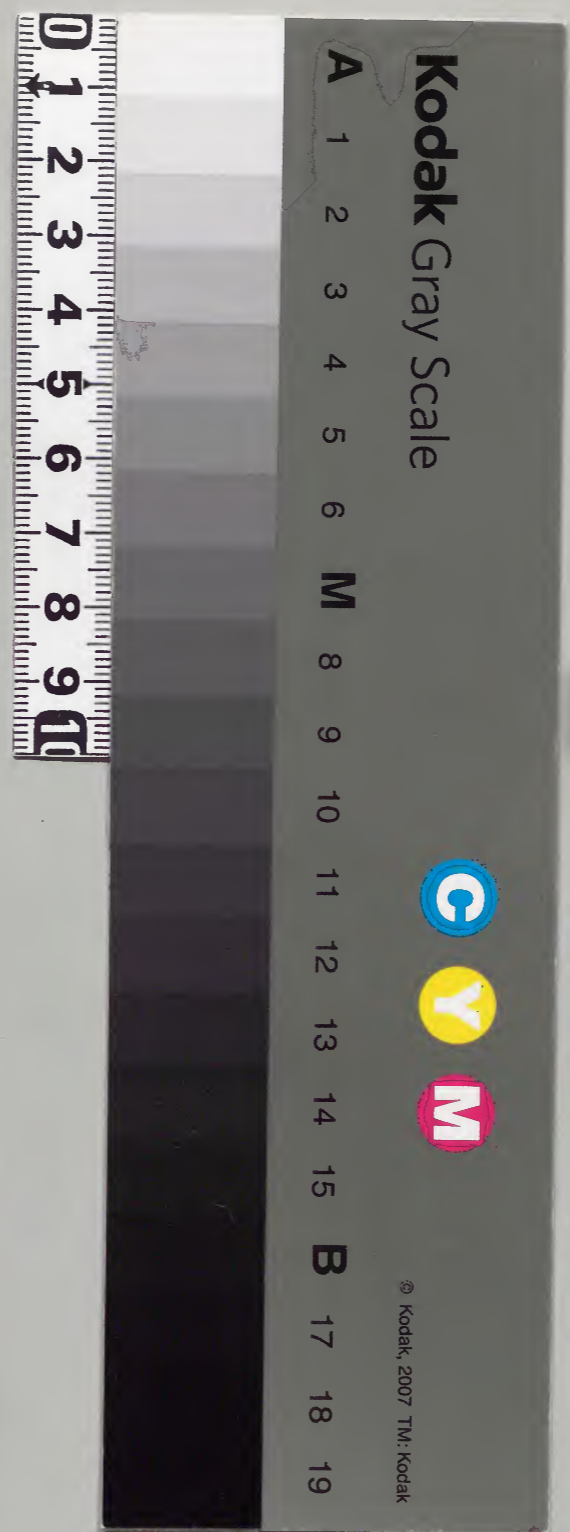
常山紀談

十五

和	書	門	類
四	三〇	三〇	一
二	三	元	一
七	二	函	架
一	七	冊	架

和	書	類
四	三〇	一
二	三	元
七	二	函
一	七	冊
一	七	架

內閣文庫	番號	和	42301
	冊數	17	(2)
	函號	170	49



BOOK 1

常山紀談卷之十五目次

浅草文庫

一 伊勢國阿濃津城軍の事 附 佐治縫殿サダヲの事

一 長東大藏大輔降参ナガツネの事

一 渡邊才兵衛武功ワタナベの事

一 石田成生捕イシダの事

一 小幡助六郎忠死コハタの事

一 河村権七郎カワムラの事

一 加藤清正の北カトウ北方大坂を忍ニギび知チれレの事

一 浅井アサキ暇合戦前田丹羽マエノの将士功名シウシの事 附 松平久兵衛マツダラ軍イク學ガク

一 鍛煉タシの事

一 山田勘六郎討死ヤマダの事

十五目次



黒田如水凶相の馬に乗まじり事

黒田大友石垣原合戦の事

三宅喜藏武勇の事

肥後國宇土城攻杉本次郎今夜討の事

福嶋家の士大將 東照宮を拜する事

加藤清正治亂を論ぜし事

黒田如水豪氣の事

常山紀談卷之十五

備前國 湯浅新兵衛元復輯録

○毛利秀元吉川廣家富田信高の阿濃津の城を攻む時城兵

城の乾れ隅に有る加藍を焼拂ふ所は俄に風が吹きて

を城に吹かくる寄手是に乗じていざ打破んとて穴戸備

前守隆家先づけしを攻入るを分部左京亮政壽城中に

加勢有し切て出穴戸と戦ひ互に痛手負り信高本

丸の大小をすみ出鎗を合せ相戦ふかゝる如く容顔美

しき武者緋の物具中二段思草よておどろきしを

著鎗を提来て富田が矢面より立ちあがり支へ戦ひし

中川清左衛門といふ者かゝる富田門に入る時かの武者を認めれば

鞍といへる作の鞍鐙を添て佐治と共へらる其あけ此
年佐治富田此家を知く筑前中納言秀詮と仕へ其家
滅びく黒田の家と仕へる富田禁錮せらるるが大坂
陣と後藤よりのうまきと士三十騎の將となり五月六日
道明寺の軍と寄手此物色をえんとく谷川とらちよ
処と東より来る物見武者より即討てて由首を以
し是後藤が手の一番首なり後藤が旗本敗れ敵
お隔らる九山の細腰少くを合せ敵一人討て由
刀を添分捕しとるも曹をも棄てり敵慕ひ来り
くまバ大坂へ引取事叶ふも討死せんとしてかけ物を
伴野次左衛門佐竹安大夫本多小右衛門もつとる鎗を合

せんといへる深田とく敵かり兼り伴野いざ是まで
よとく佐治をとり返り道明寺と平野の間少
真田よりあひく道と得り其後流落し仕へる求め食
りして江戸柳原の町家れり少むりりの所をかりて
妻と二人ありりるが京都と赴く妻殊よあをまゝある体を
いふ事を近隣の老いも心を付ていふとる日を送りし
太郎少将の禄千石賜らんとの事なまも二千石ありバ
奉公さへし其いふ小京へ引りて答るを聞て千石
むくと異名してあがりし程なく従者十人
むり引具し馬よあききりやうある士来り吾ハ佐

治なりとて妻を迎へ近隣の老よとてまはるは土産一妻を
心付くを述べて池田の家は往々去り

○関ヶ原の軍敗まらば長束大藏大輔正家江州水口の城は

引こりしを國清公船戸帶刀を使ひて降参を勧め

船戸是ハおたのまはる人然るべしと辞しやまはるも汝とく

行向へよと仰らまはる船戸方三四寸許の小鉄の板を造

らせふとて後よ入る水口は仍長束よを降参あは士卒も

別の事ゆまは此旨よくやせとやなりといふは長束阿濃津の

城攻して関ヶ原よさせ軍もせむ口懐くはさるは此城を枕

よせんとも考ども存るまなり然るま降参せんハ恥辱

よせんといふは船戸長束がかゝるの士を懐く懐より鉄の板

取出し焼てまらりゆ三左衛尉が初今かくしお偽り印

小鉄火をとりて見せやせんといふ切し体はあもい

つりなりとて長束感してまはるもあはるは

いふあ人も力なり汝がまはるもあはるは

降参せんすまはるは是ハ見苦しき扱よりとまはるは

真宗の脇指をいふなり船戸尚座を立ざり

くば長束小姓をよんど硯をわし降参まはるは

船戸はいふなり船戸帯刀長束城をわくまはるは

固の兵を入らまはるは

○佐和山の城をかゝる堀尾信濃守通晴渡邊喜兵衛を

呼ぶ凡城を攻るは敵の虚实土地の要害具よ知らる

叶ふまどいりしをて生捕をせしや汝事よくせんやと
らまきつれバ渡辺音を取らふ易うと云ふまどいりて生捕せん事
叶ひぐうと云ふもたそぬは渡辺が弟才兵衛進上殿の仰
よ何とてさハのむひらで喜兵衛年老より軍令を司らる
ハ然るべしかゝる力業ハ才多なる仰付らまじよといへバ喜兵衛
思慮ある事あらず無禮なりといふを通晴大志壮力人の
及びぐうと云ふ事をもなす得べき眼ざしよと才兵衛を称せ
らまじりバ才兵衛座を立ちり兄の河ハ禮義なり汝が祠
ハ血氣なりと人々戒めくまじども吾思ふ子細あまじバ
とて夜の更を待て従者一人お連ひそりに城際よまのび
ゆく茂りし乗の木れ下よささやく者あり近くありてそ

まのぐさどと二人鎗とらまじりかゝるを才兵衛一人ハ突伏せ
一人ハ追ちりし首を従者よめりてせ城よ忍入りて生くゆ
事萬よ一ツなり此有様を兄よ伝ふと云く堀よ添くゆ
西よ夜更りするもむらりて打る其跡よつりてゆげバ
あり顧て名乗まじりて弓よ箭をつぐ才多場小声よ敵の
忍び後より来るぞ爰は待りておんとつひつあもみより
一丈けよなうりける時鎗を取のべく敵の弓弦を突切く其
後鎗を取直し諸膝なりで打伏せ上よあかり汝よく圍
よ吾殺さんとおハあゝと云ふくの子細有く忍び来り
よ行あひしハ天のあすけなり汝死んとならば吾汝を刺
殺して自害せんそまハ益なり吾は随ひ来まじよといふ彼士

怒^{イタ}り^ク既^スに斯^カ成^チ上^ハ命^イ生^チんと名^ナらんやと^ク疾^{トク}刺^シ殺^ス
されよと云^イ才^{サイ}鳥^{トウ}傷^キすく二人^ニ死^シん^{コト}よりけ^キ功^{コウ}あ
らん^{コト}そよ^ク軍^{イクサ}神^{ガミ}も照^{セウ}覽^{ラン}おれ吾^ワ偽^{イツ}な^カま^シよと^ク之^ノバさ
らバ^イい^ウも^モせ^シよと云^イ才^{サイ}系^{ケイ}悦^{エツ}んで引^{ヒキ}起^キ一^{ヒト}物^{モノ}具^グよ付^{ツキ}
塵^{チリ}を打^ウ拂^フひ^キま^シバ彼^カ士^シあ^リま^シ汝^{ナニ}ハ大^{ダイ}剛^{コウ}の人^ノも^テ志^シら^ズ
弁^{ベン}音^{オン}明^{メイ}ら^ズなり^カか^クめ^ラれ^ぬま^シど取^{トル}六^{ロク}名^ナら^ズ松^{マツ}田^タ大^{ダイ}
久^クと云^イま^シめ^シと^クい^ハば才^{サイ}場^マ松^{マツ}田^タを先^{サキ}ま^シて^ク始^{ハジ}首^{ウデ}を取^{トル}
し^テ所^{トコロ}は行^{ユキ}バ從^{ジュウ}者^{シャ}多^タき^{コト}志^シ度^{タク}も追^{オツ}つ^クい^ク知^チら^ズか^ク歸^カら^レ
ま^シとい^ハ才^{サイ}多^タき^{コト}お^ウい^ウふ^{コト}志^シら^ズま^シや松^{マツ}田^タハ逃^{ニガ}べ^シ人^ノも^アあ^リ
とも汝^{ナニ}付^{ツキ}そ^ノひ居^イよと云^イま^シ城^{シロ}の方^{カタ}よ^クあ^リま^シ志^シ度^{タク}も氣^キ喘^{ケン}
ま^シま^シ逢^{アイ}生^{イク}捕^トを^シて^クそ^ノい^ハと云^イま^シ城^{シロ}門^{カド}ハ固^{カタ}く^ク閉^トま^リ

兄弟^{ケイテイ}打^ウつ^ク歸^カら^ズか^クし^テ中^{ナカ}通^{ツウ}晴^{ハレ}や^クし^テ事^{コト}も^モ志^シ
し^テよ^クし^テ一^{イチ}同^{ドウ}ふ^シと^クみ^アへ^リ生^{イク}捕^トハ^イう^ハせ^んと^クを^シ
東^{トウ}照^{ショウ}宮^{ミヤ}心^{ココロ}よ任^ニせ^しと^ク仰^{オホ}あり^{マシ}才^{サイ}場^マ松^{マツ}田^タよ^クせ^し詞^ジ志^シら^ズ
か^クり^マ松^{マツ}田^タハ腹^{ハラ}ま^シて^クせ^られ^バ臣^{シン}先^{セン}死^シ罪^{ツミ}よ^クら^ズい^ハべ^シと^ク
ど^ク勇^{ユウ}有^{アリ}又^{マタ}な^シま^シけ^レ有^リと^ク松^{マツ}田^タも^クら^ズい^ハべ^シと^ク
○田^タ中^{ナカ}兵^{ヘイ}部^ブ大^{ダイ}輔^フ吉^{キチ}政^{セイ}石^シ田^タを^シ生^{イク}捕^トよ^クせ^しま^シら^ズい^ハべ^シと^ク懇^{コン}懇^{ケン}會^エ
釈^{シヤク}して^ク教^{キョウ}十^{ジュウ}萬^{マン}の^ノ軍^{イクサ}兵^{ヘイ}を^シひ^キま^シら^ズい^ハべ^シと^ク事^{コト}智^チ謀^{ボウ}の^ノ也^{ナリ}
き^りと^クし^テは^ベ一^{イチ}軍^{イクサ}の^ノ勝^{カツ}敗^{ハイ}ハ^ク天^{テン}の^ノ命^{メイ}よ^クら^ズい^ハべ^シと^クバ^カカ^ラよ^ク及^キび^テ
と^ク禮^{レイ}義^ギ正^{テイ}し^テい^ハべ^シと^ク三^{サン}成^{セイ}打^ウつ^クい^ハべ^シと^ク
三^{サン}成^{セイ}此^{ココ}時^{トキ}上^{ウエ}の^ノ楹^{ヒラ}よ^クし^テい^ハべ^シと^ク田^タ兵^{ヘイ}と^ク呼^ヨぶ^{コト}
か^ク如^カく^ク此^{ココ}時^{トキ}も^ク田^タ兵^{ヘイ}と^ク云^イま^シ常^{ジョウ}小^コ督^{トク}ら^ズい^ハべ^シと^ク

秀頼公の御為に害を除き太閤の恩に報い奉るんとせむ
し小運尽かくありし事何を悔むべき是ハ太閤より賜ハ
ア切又正宗の脇にありかきふまのすすよとて興
ケル

馳走の士を付くりてありし時にも片時も早く死ん
とく食せぬ馳走の士いづれ兵部がとうひよ及ぶべき
よくりしとて最後の御用をいへりしとひひきき
さうば此頃腹中のゆきまは葦雜水をききと云へば
其設してすめくまは快く食して打伏し軒かき
しり

田中石田を引具して大津よりありきまは 東照宮本多

正純よ石田を守護とせきよし仰せられと正純石田小向
ひく秀頼公年若く事の是非をあらしめさし唯太平を致
と道こそ有べきよしとて軍もかく恥辱も及ま
しとて云へば三成吾土民より國を賜ひし恩を
へんやうな世のまほをなす徳川殿を打たさば終り
豊臣家のよあやうとてせむし秀家景勝を始とて
同心なかりしを志ひく勧を遂に此軍を起し
ま戦ひに臨んで二心ある輩裏切せしを勝べた軍は打
ぬるこそ口惜きと二心ある人ごふたは汝しちを始め
くれぬかか免あるん志を失ひし運盡ぬまは九郎
判官も衣川よて空しくなりし吾打まけハ天命

とらふ正純智将ハ人情を討て時勢を知りてこそ中世諸将
の同心せざるも知むかろくも軍を起さるるものな
軍敗ましく自害もせでかめらるるハいふとらふは三成念
く汝ハ武畧ハあも知ざりも腹切人手ふかからしむるハ
葉武者の事ハ頼朝公土肥の杉山く朽木の洞身身をひ
めハ心ハたのも知らず大庭よかめらるるハ汝ハ嘲らるる
大将の道ハかるとも汝が耳ハ入らるる今ハ是もでなりとて
物もいふ

東照宮の御前へ三成を召出せしむる武将もかゝる事
むしり有りきめなり恥ありあはれと仰らるるハ三成
うも打とけく唯天運の志くも思はるる

首をとりらるるも東照宮三成ハはるる大將の
器量かろくも平宗盛ハ大ニ異なりと仰有るも
いり又一説中納言秀詮石田が体を忍びて座を立れ
しハ細川忠興何でハ益ありとていふも入る三成
秀詮をとりて汝が二心あるを知りてハ愚なりとて
いも約はたがひ義をもちて人を欺さく裏切らるるハ
武將の恥辱末世も語り傳へて笑あべいと云くハ
秀詮初なりとて又三成大津よける時御本陣の門外
小畳をくも其上よ坐しつゝハ諸將おるるハ福徳正
則無益の乱を起して其有格あるといふも石田の
首を生とり縛らるるハ天運なりと云くハ正則初

かゝるるに黒田長政通らるる馬より下りて不幸よ
てかくありぬ是をそとて羽折をぬいでせし
まじりといひ

石田を始先小西安國寺生ども三人の肌は木綿のやま
しるのそとて東照宮より召石田ハ日本の政務を取
る者なり小西も宇土の城主なり安國寺まじりしむべき
者よの軍敗れ置てあた安となすも大将の盛
衰ハ古今は珍しく命をまじりよ棄ざるハ將れす
和漢其きめ多し更は恥辱はけ其ま京中をこぼ
しは將る者よ恥をあはる事吾恥あるべしと仰有て三人
は小袖を賜り石田はえすればハがあはる

問ふ江戸の上様よりといはば難事をこぼし徳川殿と
答ふハ三成何徳川殿を尊ぶべきと一言の禮は及ばぬ
お笑ひて居り

小西ハ敵討の吾ふこれまでのいひ心は恥しり
涙を流し安國寺ハかくいそを赤面し俯し居
アハるも三成を誅す耐車ま載る六条河原ま出
石田顔色平生の如くなりしや又石田治給が天下を取
し云々を言ひお笑ひし大軍を率ゐ天下は
目の軍一り天地やれは間ハかくれあはる
し心よ事あるなやさびしきもあはる

○小幡助六郎信世ハ上野今信繁ガ三男カウシもく上野の人なり千五歳カウシもく大坂オホサカより諸家の体タイをなす石田ハ太閤無二シイワウ ムニの電臣オウジンなるバ仕へたり後禄二千石をあたへたり関ヶ原セキにて三成サイサウ敗北の時ハイボク一隔ヘクラらして三成サイサウは従ひてそのを切ぬけく三成サイサウは仍方ユクヘを仍タス江州石山カサノイノヤマより来りて郷民カウミンかゝめりて大津オホツにあり百姓ヒヤクニヤウをバ賞せられて金二十枚を賜りぬさて信世を召出さし石田イシダが仍ユクへをとりせり信世兼ニゲヨて三成サイサウが士小幡助六ヲバノサツとヤ老オシもく主ヌウの在所サイニヨよく知チり然シカもども年比恩を借トシゴロオンしる身の今日コノニチ此難ナンをのぞくん為タメ主ヌウの在所サイニヨをバ不義フギやんきし人骨ホネをひりてかゝりて試小幡助六シヨロニ ガウシに切てり 東照宮トウショウミヤより召忠義シウウギの士たり三成サイサウ

が行かゆめく知チりてあはれなるを落行オチヨクかゝめらまされ士サシあゝの老オシを携カウ向メイ及イぶべうに將シカり人ヒト忠臣チウジン義士ギシよ不便ヒビなるとかゝりて繩ヒバをとり仰有オウユウて則ソク赦シヤせられひかり信世シノセ近チカたあゝりの寺テラは仍ユクせ申シノこはく語カクりてハざゝ外ソトは赦シヤを蒙カカりて亦モト恥チはあゝんも討チカりて死シをかくしめしめしめし自害ジガイするを大津オホツより上ウケバはの外ソトハ

○関ヶ原の乱セキガハラノラン此時コノトキ加藤嘉明カトウカキアキの少シカ方カタ大坂オホサカより河村權七カハムラキチ郎ヲウラを伊豫イヨの松前マツノキより大坂オホサカより長臣チカウジ等ナドかゝりて思オモひく屋敷ヤシキより北キタの方に相見アイミえ松前マツノキより長臣チカウジ等ナドかゝりて思オモひく屋敷ヤシキより取トルんとせんし臣シかゝりて思オモひく屋敷ヤシキより

しく屋敷の隅に井樓をのり柵の本をひ敵にむらへるが如しか
かゝるぬ時ハ自害をすめ臣も御供に成ると云々云々細川忠康
の此方自害の後人責を奪ひ取事止らるり河村は二百石の
禄を増興へらるり小後河村のいひくは大坂川口の中より固く中へ
通へき松多丸を尾ヶ崎の漁夫をかゝり船は糸網の中よ
身をひそめ敵の中へ入るちりハ必死を思ひ定めしむるり
関ヶ原の軍は首取らるる者も同く然るる恩賞の爲は
明らかなるぬ殿なりとて出奔しければ嘉明愈々探出し
誅せむやと云々山の中よかく居たり大坂の乱起
りし時嘉明江戸に残りしめられ不慮の事ありて取まらて
攻殺んといひあへり其比夜更しく河村嘉明の屋敷の門をたぎ

青木佐右衛門を呼出し青木あやしく立ちく見ると河村なり
こゝにもいふ事とていふ河村事ありしやうな事とて
君は仕ふる者の忠を致さハ常の習ひたり然るふるあり大坂
の事小あやしく殿を嘲りて物奪りし事後悔今も益なし
十餘年山中よかく居しふ志りの事ゆく殿も危くおぼし
中よとて夜を日小継くありしやうに青木滅ぶ義理の
志ハさる事なれども殿のいふ甚くはかしくしるも
やうさる事とて帰らるといふ河村臣も者の義を知り
なバ河村はなご来らるるやといふべきは門内よごに入らる
歸きてハ口をの初よ此上ハ町屋よかく居る殿の先途を見
んと云うバ青木さるバ先きて見んとく内よ入嘉明は告る

くまごよび入よきやくて寝所召出されりが一向えきよん渡
を流きまらし河村も渡もむせむ君臣志ばり朝もなかりし河
村おのひもよのべ殿の御前よ出る事よ今生のさひゆふんと
嘉明汝が志いんやうもなりと悦まき夜明て河村をまね
し〜下終までいひとや〜大軍の援有がめくいさみきり
寵愛して八十石あるらまらり程なく病死し〜奥州
四十萬石よな〜時河村な〜んは八國政の輔佐
らんよ〜なげれ〜とや

○加藤清正の北北方も大坂よなりしを石田人おら〜と云
を〜清正より付ら〜竹田善兵衛家正大木土佐恒持
謀を〜轉法ロヨ居る清正の舟奉仍梶原助兵衛山樵

の羹汁を飲せ四夜経あ〜せだ疲ま〜大病人の〜
なり〜を〜のせ綿帽子か〜せ前後よ余か〜門番の
前〜戸をひ〜断〜屋敷よ〜事な〜及〜後ハ見
な〜ふ外め〜又川口〜蜈蚣船を晩〜
べ〜是も番船見た〜後ハ〜早〜
な〜守ら〜ぬか〜清正より吾ハ石田興す
ま〜い〜小の方を敵〜落せよ
か〜云来〜大木〜事〜ハあり小の方に
此由を告〜梶原余の下は小れ方を〜其上よわ
〜毎の〜か〜番の〜通
土佐も〜供〜若見外め〜小の方を刺殺〜切

死シるルべしシとトいイひヒしシてもモ事コト故コトなニらニまマババ轉テ法ホウ口コはハくク頓トて
蜈蚣ムカデ船フネもモ乗ノりセたタ知チりリ番バン船フネのノ前マヘをヲつツとト行ユくク二ニ三三町トウあアりリ
くクまマあアれレいイくクとトいイひヒしシたタひヒりリめメくク間マはハ鳥トリのノ飛トびビがガぶブくク
一里イチリあアまマりリもモこコのノひヒぬヌ番バン船フネもモくクまマりリれレしシよヨとト破イちチをヲ
あげアゲ追オ付ヒツくクせセしシ間マはハ行ユくク遂ツにニ肥ヒ後ゴはハ下シ下シとトいイひヒしシぬヌ大オ木キ
并タ回タハハ大オ坂サカはハ居イ残ノコりリしシ事コト洩モれレるル打ウ手テ来キらラババあアらラどド戦タん
とト待マたタしシにニ関ケ原ハラのノ軍イクサやヤあアまマりリババ思オモハハしシよヨとトいイひヒしシ難ナをヲのノぐグれ
りリ大オ木キのノ左サとト成ナ政セイはハ仕シへヘ後ノチ清キヨ正セイはハ仕シへヘ才サイ畧リョク篤トク実ジツ兼ケン備ビへ
しシものノたタあアまマりリ清キヨ正セイ電デン愛アイ厚コウりリしシ今イマ度タクのノ事コトあアりリてテ又マタ二ニ千
石イシのノ株カをヲ増マあアしシらラまマりリしシたタりリ
○前マヘ田タ利リ長チヤウのノ士シ松マツ平ヘイ久キウ兵ヘイ衛エイ若ニギハヤヒきキはハりリ兵ヘイ書シヨをヲ讀ヨミ一イツ飯イッパンのノ間マもモ懈オヤス

○前田利長の士松平久兵衛若きは兵書を讀一飯の間も懈

らラばバ常ジョウ人ジンはハ語コトてテ云イハふフ此コノ一イツ人ジンはハ射イちチしシよヨとトいイひヒしシあアらラばバ万マン人ジンをヲ一
刀タチはハ斬キルのノ道ミチなニりリとトいイひヒしシ利トシ長チヤウ大ダイ聖セイ寺ジのノ城シヤウをヲ攻セ落オトしシしシ返ヘりリ時トキ
利リ長チヤウのノ士シ大ダイ將シャウ山サン崎キ長チヤウ門メン守シウ浅セン井イ暇ハらラせセんとト云イハふフ久キウ兵ヘイ衛エイ道ミチ細ホソく
左サ右ウ深フカ田タなニまマりリ大ダイ軍イクサのノ進シン退タイいイくクもモあアらラばバ半ナ退タイなニらラしシ時トキ長
重シヤウ兵ヘイをヲあアまマりリ進シン退タイなニらラしシよヨとトいイひヒしシ敵テキハハ案アン内ナイ者シヤなニりリ必
定テイ味ミ方カタ利リのノいイくクとトいイひヒしシ山ヤマ崎キもモ入イりリ既スデにニ大ダイ聖セイ寺ジをヲ攻セ落オトしシ
大ダイ軍イクサなニまマりリ敵テキハハ攻セらラしシよヨとトいイひヒしシいイくクもモあアらラばバ討ウチ取トルべベしシとトいイひヒしシ
久キウ兵ヘイ衛エイ長チヤウ重シヤウハハ勇ユウ將シャウなニりリ大ダイ聖セイ寺ジのノ後ノチ語コトはハれレ口クチをヲくクとトいイひヒしシ
ひヒくク打ウちチぬヌしシ其ソノ鋒ホウ日ヒ比ヒはハ倍バイせんセン吾ワレハハ怠オロカりリ敵テキ其ソノ虚キヨをヲくクとトいイひヒしシ
危キきキしシよヨとトいイひヒしシ又マタ難ナあアらラまマりリ吾ワレ城シヤウをヲ馬ウマのノ蹄ヒはハ蹴キつツとトいイひヒしシ

敵の箭の一筋射を越せしむるに居る者やいべき明日は
軍陣をこぼししむるに敵を恐るぬ燈ハあすくふ知ら
せんものごと云り其夜物主皆張番を山崎打巡り見
て久き遠が足輕ハ何なり味方近く置しやとり久き傷
何へは勝敗の理を志し敵を侮り勇まわしり利害よく
たゆれ士を下知する事こそうそとれといハ山崎守て敵を恐
まてしむるに居る者やいべき明日は
そひやく留めたり久き遠が足輕ハ何なり味方近く置しやとり久き傷
驚ろこんおをこぼししむるに敵を恐るぬ燈ハあすくふ知ら

其夜長重ハ士大将を集め江口三郎左衛門を大将として夜
せんとなりしふ俄ハ大雨よく風烈しく夜討を止られし

江口風雨ハ夜討は好む事ありといふ人々皆衣をぬぎ
よなきややく御幸塚の丸右沼まゝ人馬のかけし心ま
うせ明日敵討取る時追結くせひれまゝに討勝べしと云
まゝ

長重の士大将江口三郎左衛門正良惣がまゝ見渡せば敵
段ふ引退く時こそよなきややく御幸塚の丸右沼まゝ人馬のかけし心ま
と鉄炮を打かくる長重もやどて兵をすめめらぬ

又一統長重鉄炮のさるを後まゝおどもして馬は鏝を
合せしむるに居る者やいべき明日は
の早き哉と悦びたり長重これ浅井山を取り敵の頭
上より打くるめなれば盾をつらする事ありし

ハ江口尤然るべしとてあつりつた兵三百人を引
具し浅井山よのぼり敵を目の下よ見下し鉄炮を打
りけりまは坂井与右衛門直吉も馳来る長重いよく競ひか
りし一足も前よすめ一寸も退くべしと下知せられ
り金沢の軍をゆるりた終夜の雨よかりの陣屋もあ
ざれば物具皆濡とほり鉄炮は銃口よ水入り火繩もふり
けりまは左右ハ泥あり多くハたのびて松のたれをたが
入まは足きりつとせしとりり

金澤の殿長九郎左衛門連龍が陣をめぐり江口を
かきと下知すまは松村孫三郎馬を棄出し敵の陣中を
きり切り荒田五兵衛つづいてくるを入る

松村ハ五ヶ所痛手負ひ馬より落くるを小池新を場松村を
馬よのせ引取せしとりり

長父子も止りしを専途と戦ひくるが討つ者多し長
好連こし十八歳をれ老いし討せ敵の中よかけ入り討死
せんしを横田久右衛門馬の口よら付引返して長重の軍勝
るをいふは追詰り太田但馬ハ殿の陣に軍ありし兵
ををりし馳来る水越縫殿山城橋よわく鎗を提敵小向ふ
松平久兵衛ハ太田が陣より足輕を下知して居し銀を
飾りし曹を思ひ物具も馬を逐よせたり馬を棄るあり
水越が前よつと進出く小松の士拜郷治大夫と鎗を合せりバ
水越もつづいて安孫子作大夫と鎗を合はせり

一説松平ハ不破奎多傳と鎗を合はともりり
爰あく双方も便付も老多一互は精力尽く相引よひ
退りくもの別させしなり後利長二人の前後を問まし
久き傷ゆくるハ縫殿ハ初よりあし止り久バ一番誰う争ふべ
とゆふ縫殿ハ久兵衛敵は鎗を合せし事とやくら久ハ
よふとゆ利長ゆく武功ハ及ぶ老あらんかく鎗志万人
あもこもゆりゆりとして一番を松平よ定めしれ共は感状あへん
ぬ松平此時禄五百石後三万石を賜りく伯耆といひたり
一説松平を松系よ作る何まは是ある事をまらゆ一説此
日金沢の士七人鎗を合せし中あも岩田傳左馬小松方
の手負しを首をとらんとせし小松平久き堀岩田今日

とまらるる鎗を合せ其上よひろひ首何まらせんとゆひ
うバ岩田尤なりとして同め引取りとあり後小岩田が白首
を取く大音あげ岩田傳左馬鎗を合せ又首を取とり
引取口の敵とゆりくバ一芝居みく三度の功名あへんきふ
松平があしあ巴が下知よつけく引取りとして後ハ悔らる
とゆふと岩田後ハ内藏ハと称し又利長浅井みく鎗合
せし士は感状あへんらまゆ由小松よゆらゆら小松の士は
殿中も御感状下りゆりゆんやと云くを長重浅井ハ
道細く左右除泥みくかけ引自由あへんて勝敗定らる
さるハさるゆりゆりなやされも退く敵を追詰らるあ
はくせり合をまらゆめ松のさるゆりゆりゆりゆりゆり

引取敵又少くも追返されしは似し武勇
の働ハヤリ事なまじも感状ハあつり及りばとらえん

○利長乃兵山田勘六郎八十四才も父の仇を討らん人ありあ
日利長擧藏の戸を閉して山田は鑰をあつげらまじゆ
急死来まじと叫まじしはあつりたまは念く持する杖にて突き
ふらふふ額の中アツく血流る跪く平伏せし脇差の
鞘まじまじはむひますやとてまらみうげく杖まじ
打んとせしれをかえより山田を引のけり山田此より病に
称して引り居りしは関ヶ原の乱起りし利長大聖寺の
城を攻る対一段高た所は打より武者おを見揚せし山田五六

十人計は具しつを夜期とせしり通る城ははく先
かげして一番は乗込鎧もく乳の下を突とやされ痛もなれば
堞の下はあつるかめく従者よひいあめりうは息絶る内は
利長の前より昇来り利長はく後悔せし事甚しく其あや
まらるを懇よこしりく涙を流さる山田やがて死入り行年
廿歳世はすくも美男なりしが大剛のむく死して討
死しつ其前日さつき朋友は奇南香をとり贈るを
其頃大聖寺にやらひくめてしりしり

○黒田孝隆入道如水関ヶ原亂の時九州を打平げらまじは
一馬ハ二寸計の思き馬あつる百會は手負しつ旋毛有り如水
此馬を指さしてとま此凶相をさつざりよあつれども人ハ

萬物の靈なりと聞たり人は勝へき萬物なり吾不道あり
凶相是より大なるはなり此馬の毛きばよかればと云ふ
○関ヶ原乱の時大友義統木付城を攻る如く後卷せり
もうくば大友立石より退き石垣原先陣をとり物屋田の
士大將久野治右衛門歳よりとて曾我部五左衛門を添られ
敵四五千討立石の民家を後よめて待つげを久野遙承て
金の天衝のさし物は一栗毛ある馬よ乗かれと下知し
を曾我部今志より待たせしをやぶ勝利ありあり立て馬よ
息つがせ一同よりうごはせ後よ味方のはぐく時衝がかり
一戦さしとていづれ久野が後者荒巻軍兵よりあり者
豊前の地士なりしが若た時宮松といひく十五歳より功名

せ剛の者五右衛門が何尤なり馬よあて倒し蹴ちり
敵よよべりとの敵八國替の時よくありしを若くして皆物
なり近年落ぶるて此乱を死すべき時節とてい定め鎧を
膝の上よわたせしよりみよるふへ一騎二騎をくくとかけ合
せんといくで勝べきや鎧をつれ折やどの軍なりでハ叶ふへ
らばとて馬より飛下り久野が馬の口よえ付こり争あがら
ぬりのをやりやうよとて後陣先をこそさればこそ取た
免後よおし結ん時よ懸てつき崩さべりと云くふ平田彦右
あといあの馬よ乗るがういやく後陣をまゝんとせば井
上野村すくも男あれば必先を争ふべり大友が若ども木付
よと疲まこ又爰よ来りたりすあつとといひくもは荒巻怒

て平田汝と共よ多き其の者あるが度々もあまは知らるよ今
井の浪丸軍は汝を追うけく具足タソクの押付オシツケ切キり一ヒト疵キズハ有アルべ
又其後四兵衛治右衛門汝を喰ヨモイダひとて向ムカまりし時汝がけあげさ
お討ウチつめさつたといひつるあは禄ロクを得エしうばつが蔭カゲと悦ヨロび
一ハ忘ワスレまじりといひすて馬ウマよ先イリキけすれば二十騎計ツバ
はびりしをわつめくかりしを敵ミテ三手ミテよ分ワカまてを一陣
を突崩ツキムスと久野ヒサノをやりし者なまは少スコミもあまは一文字イチモンジ小
乗込戦ウリコミひくも大友オホトモが兵ヘイども度々タビタビの事コトなまは今度コノトキの乱ミ
まは故主コノシラの招イサきよ従シひくを限セり芝居シバよひしと折マりき待マ
かけきられバ久野ヒサノ主従シラシラ五騎イツヒ一所イツヒく討ウチまじり曾我部ソノガミハ久野ヒサノが
討ウチまじりしは横ヨコあひまけ入イり討死ウチシと平田ヒラタハ久野ヒサノが討ウチまじり

て馬を引返ヒキカし引退ヒキきぬ荒アサ芝シハ敵キリ殺コトひ掛カるをえく引
んとく人数ニジンを集ツふ敵キリ嚴ギンし進スむと見て首クビをバ皆捨ナシて
馬ウマの輪ワを巻カく引ヒキざり後殿シノガし引退ヒキきく久野ヒサノが討死ウチシを
知ラざりし其日コノヒの功名コウメイいづれ成ナり黒田クロタの二陣ニジンの士大
將シラ井上イノエ九郎クワ右衛門サウモウ元房モトノボ後周ノムラ野村ノムラ市右衛門シウモウ後車ノクルマ人ヒト遙ハシし跡アトまで関セキの
おを穿キ此山コノヤマよ上ウり敵キリの軍イクサ立タてを見ミ指サシくべしと井上イノエをえ
よ下知シし進スむは好村ノムラ先サキ軍有イクサハ分明コトシたり何見ナニと事コトの
まきしといふ井上イノエが陣ジンおろしあは通トさざれば今イマ少オウ先サキの
押オシぢられよ廣ヒロき所トコロを陣ジンせんといへども陣ジン入イられバ獨ヒト言コトして
怒イカりくは井上イノエ主従シラシラ三騎サンキ小山コノヤマよ争マひけし物をぬい
味方イカタをまもるべき陣ジンをすめり

井上唐冠の曹鳥毛此棒のけしおとつり又佩楯を
取く捨くまじバ井上が手此者もらやとけし軍よといは
めしとなり

井上野村敵ハ皆かちどらなり馬のかけ場をたのむも必死
の敵よかりく〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜皆馬よりなり立勝よ
あつて敵も殊に譜代重恩の士どもつを限と思ひ定め
し〜〜〜〜バ敵か〜〜〜〜相が〜〜〜〜待軍して突
崩〜〜〜とも足を乱して追〜〜〜と下知しおづく〜と
お〜〜〜大友が兵是を〜〜〜は〜〜〜かけせば忽突出さる
と〜〜〜し〜〜〜ひ〜〜〜り野村ハ朝鮮より漢南の軍は功色
勝よも負行歩よは任せられバ片ものよ〜〜〜は馬よ

争ふとい〜〜〜下知しあり石垣系ハ原の中よ高サ一丈餘乃
石垣土手六七町討もつ〜〜〜り井上野村あは石垣とこな
〜〜〜バ軍よ勝〜〜〜進〜〜〜バ敵も回く進んで石垣を
踰んとせ〜〜〜をつき〜〜〜〜〜〜も北るを追きて井上鎗を接し
へ押し〜野村ハ馬を乗せ〜兵を整へ〜大友の士大將吉
弘加兵衛宗像掃部是を見〜〜〜か〜〜〜ハ味方まけ軍を〜
敵勝よ争〜〜〜足を乱さん〜〜追立んと思ひ〜〜カ〜〜と
ても討死せんと思ひ定め〜〜〜らんと〜二千討〜
〜〜〜あ〜〜〜井上野村是を見〜〜〜〜〜〜折返〜
相が〜〜〜も〜〜〜待〜〜〜間近〜〜〜詰〜〜〜散〜〜突合切答
〜大友勢一町け〜退〜〜追も〜〜ら〜〜の芝

居小跪^{ヒキマ}心静^{ココロシヅカ}息を休^{イホ}ぐ大友^{オホトモ}勢又^セ押^{オシ}ぬりく爰^{ココ}をせん
ど火^ヒを^ヒあ^ヒして戦^{タケ}ひたり吉弘^{ヨシヒロ}の尖^{トギ}眉^{メジ}刀^{ヤリ}を打^ウちたりくふを最^{サイ}
後^ゴとあ^ヒま^ヒひ^ヒつ^ヒを井^イ上^ノ見^ミてい^ヒぎ^ヒあ^ヒりあ^ヒんと^ヒ初^{ハジメ}を^ヒか^ヒれ^ヒバ
吉弘^{ヨシヒロ}お笑^シひ渡^{ワタ}し合^アせしが草^{クサ}摺^{ズリ}の^ヒま^ヒを^ヒ十^{ジウ}文^{モン}字^ジの^ヒ鎗^{ヤリ}ふつ
くせ^ヒく^ヒ深^{フカ}を^ヒな^ヒれ^ヒバ少^コく^ヒも^ヒあ^ヒり^ヒく^ヒも^ヒを^ヒ小^コ栗^リ治^チ右^ウの^ヒが^ヒ従^{ジウ}者^{シャ}
弓^{ユミ}を^ヒ持^モつ^ヒが真^{マコト}中^{ナカ}を^ヒ射^イつ^ヒぬ^ヒく吉弘^{ヨシヒロ}心^{ココロ}猛^{マウ}く^ヒと^ヒい^ヒども終^{ハジメ}に^ヒ
叶^{カナ}い^ヒく^ヒ首^{カビ}を^ヒば小^コ栗^リ取^{トリ}て^ヒたり

又一^{マタ}説^{セツ}よ吉弘^{ヨシヒロ}ハ黒^{クロ}草^{クサ}よ^ヒてむ^ヒぐ^ヒく^ヒ甲^{カウ}を^ヒ忘^{ワシ}熊^{クマ}毛^モゆ^ヒく
志^シを^ヒ飾^{カザ}る^ヒ曹^{ソウ}あ^ヒく^ヒ三尺^{サンシク}計^{ケイ}の^ヒ刀^{ヤリ}を^ヒ以^モつ^ヒ井^イ上^ノと^ヒ馬^バ上^ノふ
て渡^{ワタ}し合^ア馬^バより突^{ツキ}落^{オチ}されしが脇^{ワキ}指^{ササ}を^ヒ抜^{ヒキ}て手^テ裏^{ウラ}剣^{ケン}を
あ^ヒつ井^イ上^ノが弓^{ユミ}手^テの^ヒ股^マよ^ヒ中^{ナカ}る^ヒ其^{ソノ}間^マよ^ヒ小^コ栗^リ引^{ヒキ}組^{クミ}で^ヒ吉弘^{ヨシヒロ}が^ヒ首^{カビ}

を取^{トル}しつ^ヒり又一^{マタ}説^{セツ}よ吉弘^{ヨシヒロ}と井^イ上^ノハ吉弘^{ヨシヒロ}一^{ヒト}年^{ネン}中^{ナカツ}津^ツよ有^{アル}て
志^シを^ヒ飾^{カザ}る^ヒ深^{フカ}を^ヒな^ヒれ^ヒバ此^{ココ}日^ヒ井^イ上^ノ小^コ向^{ムカ}く^ヒ弥^ヤく^ヒや一^{ヒト}鎗^{ヤリ}あ^ヒん
とい^ヒつて突^{ツキ}合^アし^ヒが吉弘^{ヨシヒロ}が^ヒ胸^{ムネ}板^{イタ}を^ヒ二^ニ鎗^{ヤリ}ま^ヒく^ヒ突^{ツキ}く^ヒも^ヒ甲^{カウ}
か^ヒく^ヒ裏^{ウラ}か^ヒび井^イ上^ノ音^ネが^ヒ内^{ウチ}曹^{ソウ}を^ヒ突^{ツキ}く^ヒも^ヒ十^{ジウ}文^{モン}字^ジの^ヒ接^{ケツ}
手^テあ^ヒく^ヒ忍^{ニギ}の^ヒ緒^{イタ}を^ヒ切^キ曹^{ソウ}傾^{カエ}きて^ヒ目^メを^ヒあ^ヒさ^ヒだ^ヒくれ^ヒバ少^コく^ヒも^ヒあ^ヒり
あ^ヒく^ヒ如^ニを^ヒ吉弘^{ヨシヒロ}が^ヒ丸^マの^ヒ脇^{ワキ}より^ヒ下^{シタ}着^キの^ヒ青^{アヲ}く^ヒゆ^ヒを^ヒ目^メを^ヒ見^ミて
て脇^{ワキ}腹^{ハラ}を^ヒつ^ヒき^ヒつ^ヒり^ヒバ吉弘^{ヨシヒロ}遂^{ツヱ}に^ヒ討^{ウチ}つ^ヒり^ヒも^ヒり^ヒり^ヒ又^{マタ}此^{ココ}
軍^{イクサ}場^バの^ヒ後^{ノチ}よ吉弘^{ヨシヒロ}が^ヒ厲^{レイ}鬼^キあ^ヒく^ヒも^ヒゆ^ヒく^ヒの^ヒ人^{ヒト}は^ヒ栗^リを^ヒな^ヒ
く^ヒも^ヒゆ^ヒ吉弘^{ヨシヒロ}が^ヒゆ^ヒり^ヒの^ヒ人^{ヒト}石^{イシ}垣^キ原^{ハラ}の^ヒか^ヒへ^ヒ別^{ベツ}府^フと^ヒり^ヒあ^ヒゆ^ヒま^ヒ吉
弘^{ヨシヒロ}が^ヒ屍^{カネ}を^ヒ葬^{イナ}て^ヒたり^ヒ別^{ベツ}府^フ清^{キヨ}田^タ濱^{ハマ}田^タの^ヒ百^{ヒャク}姓^{セイ}あ^ヒり^ヒを^ヒあ^ヒゆ^ヒま^ヒ吉
采^{ソウ}を^ヒ供^{キョウ}よ^ヒ忽^{トキニ}た^ヒり^ヒあ^ヒり^ヒ吉弘^{ヨシヒロ}が^ヒ嫡^{チク}子^シハ^ヒ清^{キヨ}田^タよ^ヒ仕^シへ^ヒ二^ニ男^{ナン}

堤より行く明るをまの川宇土まは南條元琢より居り此元
琢ハ伯耆羽衣石の城主南條左衛門元次ヲ二男少く兄の元重ハ
少らぬ本剛の者なるが毛利元就と軍さる事度々及らる不
敵さるすて尺一騎馬上より上帯をめてかけし半甲ヲ
後ハ軍兵ども追つて速ハ國境ハ池乃押寄る軍兵を追散
し勇士たうが秀吉の勘氣あくハ西行長が許よかされて
朝鮮でも武勇ハ振廻せしなり此度清正もあつ只一騎
城を乗出元琢が從者福西九郎大夫是も十八の時より輕便の
軍よあひく物所あつ元琢はねくまて城をゆく池乃
山の上ハ清正の馬藪の馬印ひらめたく見えりまハ跡進んで
三宅より合元琢馬より下りて三宅と鎗を合せりまを福

西透向なくまより三宅を斬る三宅がつまらる鎗を元琢握
りてはひは引奪ひく既ハ危りし三宅ハ從者元琢が曾
の真向を一刀斬付し元琢目眩きてくまて口を
扱て三宅が從者を切倒し清正苗の二本あるハ三宅喜藏
あつん討ちま老もと下知せし詞の下より飯田角を樹
莊林隼人馬よりしれを合せくかけ来りし元琢敵つた
かのばあよりあんと三宅をすく引込て清正三宅を討ち其
日被らま羽織ハ千石の禄を添くあつへらまらり
又三宅元琢が曾をつき落せしハ頼よるあつし浅寺
あつまハ三宅が鎗よ取付しれも三宅鎗をすく組合しり
くもいし

其後関ヶ原の軍破まりて行長生捕まりたり。清正使を城に
 立城を明けと云まはる。城代小西隼人自害して城中の者
 も助けたり。清正許諾して八代の城代小西若狭
 も自害し。宇土八代を清正に授く。清正南條は六十石の禄に
 典へらまかり。三宅と南條と物どりたり。三宅我もさ存せしむけ
 びして残多し。と云まはる。三宅我もさ存せしむけ
 三宅宇土と組する時忽刺殺せしむ。其日指する小脇指
 少し長うり。と云へり。

○清正宇土を圍む時ある夜敵夜討せしむ。なむ。下
 知せしむ。杉本次郎介を大将とて清正の陣に

夜討せしむ。日下坂平分坂川忠を合せしむ。攻戦ふ杉本守
 固き。城中小引返に田中兵助ハ酒は酔く。杉本守
 鉄炮の音は起あがり。鎗を取てかけ知しに敵引取。門
 内は入く杉本一人大手の柵の木戸口は残て止る。田中
 かけしむ。杉本十文字の鎗あく。田中を一鎗つた。柵の中
 小入まり。清正火を燈し。軍せしむ。老も。田中今
 夜先がけしむ。清正能見く。一番日下坂坂川二人の内へ
 二人とも前創る。弓ハ鎗を合せしむ。射し。一回よか。六射
 ます。のたり。田中が創ハ右の腕より。鎗創あ。バ尤の。有
 ぞ。小横は疵のあ。ハ汝が自ら切。と云まはる。

田中敵ハ銀のた。の立物打。曹を。十文字の鎗を

杉本次郎サキモトの名乗ナマリしつたナホに偽イタリと名召ナメひりんハ不幸フカクの至イタリ
まハ退ヒキきつて後城明キコつハ杉本も清西キヨサイは奉公ホウコウしつたハ
此夜討コノヨの事コトを問トまりし杉本城サキモトは入イりし時トキとらハいの曹サウ
を忌鎗イミヤを提サシて走り来キりし武者ムシヤを一鎗ヒトヤリつりしハ清
正田中コトシが河邊カノヘに符合フカフしつたハ五百石イハヒの禄ロクをあハへりし田中
其夜一通イツウの書シヨをゆハ虚名キヨマイをきり世ヨの讒ソネリをあハひりし加禄カロク
中ナカの禄ロクを添ソヘくハ肥後ヒゴを立退タチヒキりし田中タナカハ其初ソノハジメ盜賊トウサク小
て有アリし石川イシカハ五右衛門イヘといハ強盜カウタクの長チヤウを秀吉ヒデキヨの時京トキキヨの三
條河原サウカハラにて刑罪ケイザイせしめし道ミチく見物ミモノの男女群ナニニヨクンをたし田中
其中ナカは紛マギまハ石川イシカハを引ヒキくる時トキとつと飛トビあハり石川イシカハが縄ナハ
取トリを唯一ユヱイツウ刀タウを斬倒キリタフし五右衛門イヘ反日ヒココロ比ヒの恩オンを報ハクしつたハ呼ヨバひりし

こゝだひりめく間よ人の中よまき入終よ逃おくる男なり此

時二十六歳とや

○関ヶ原の軍タリに功有コトアリる諸將シヨウシヤウの家臣カレンを召シく 東照宮御盃サウキヤウを
下されし時福嶋正則フクシママサノリの士大将福嶋丹波フクシマタニハハ跛尾ヒキ関石見セキミハ瞎クマあり
長尾隼人ナガオハハツホ聶ツホなりし近習キンシユの人々ヒト能ヨクもかハる集アツりし
とハ聞キく名汝ナニ等トシ年若トシくとも能ヨクまハけ女メハ容儀ヨウギを
まハりし形カタチハいハくもせよか軍イクサに功名コトナマしつたハ男ヲトコ
とハハむハぞか彼三人カニサンハ世ヨに勝マつたハ大剛ダイカウの者モノあり汝等ナニガラ
志ココロ十ト二三ニを彼老カニに似ニせし人ヒトハハよりなんハとぞ仰オホせし
○関ヶ原セキガハラの後ノチ 東照宮石田サウキヤウイシダが乱ラシハ雨アメふりく地チくハまハりし
回マり此コノより静謐シヤウミツありんと仰オホせし小諸大名コモロノナマ皆祝ミタマシしなりし

小加藤清正仰のめく悪逆の輩誅せし恭平と人必
然ゼンみん然ゼンまじも天下に治乱ハ天に陰晴インセイよクんひるん
ハ晴渡ハハアクる晴天セイテンとクるも俄ハカに雲の出来て雨アメをクめ
事コトもクるのノみんバ測ハカりたハ人此心ココロよクんト中ナカされレまバ
浅アサくバ御感ミカニりククなリ

但タ清正キヨシの此論コノロンどクもノ所トもク此事コノコトなりクや詳ツツるバ

○関ヶ原の時黒田如水ハ豊前中津より九千餘の兵を率
ゐ九月九日打出く諸所の城シロとも攻落メ筑前筑後の浪人ラウジンを
相集アヒり大軍オホイクサよク対タイ嫡子チカシ長政チカサダ使来ツケ関ヶ原セキガハラより石田を
とクめ敗北ハイベキ金吾キヌゴ中納言ナカノリ秀詮ヒデアキハ長政チカサダの謀ハカシよクんク裏切ウラギリ
せクまク一ヒト告ツクらク一ヒトば如水ミヅノ大オホ怒イカリりクつけ果ハテされ

甲斐守カヒノミより天下テンカ各目ツクメの軍イクサハクとク月日ツキヒをクるク浪人ラウジンは
すクれクをクあクるク何事ナニコトの忠義チウギよク日本ニッポンのク
つけハ甲斐守カヒノミなりクとクはクやクるク其後ノチ長政チカサダ筑前チクセンを賜タマ
りクるクバ如水ミヅノも京キョウより上ウらクるク諸國シヨクニの大名オウナミ如水ミヅノの門カドよ
来キアクく市イチをクあクるク山名ヤマナ禪高ゼンカウ如水ミヅノと年比トシヒの友トモなりク
如水ミヅノの許ヨリよ来キアクく諸將シヨウの尊崇ソウソウ大方オホカタありクバ殊コトに夜中ヤチュウに密ヒソカ
談ワザもクるク世ヨの疑ウタガひクなりク就中シユチュウ三河守ミカワノミ親オヤの如ノくク
敬ウヤみクんク徳川トクガハ殿ノ怪アヤしク徳川トクガハ殿ノ遠トホき
慮オモあクるク人ヒトなクるク心ココロ安ヤスく立入タチイル人ヒトの中ナカもクいクるク目
附ツケをク設セけクらクんク筑前守チクセンノミの武畧ブリョウ徳川トクガハ殿ノ賞恩シヤウオン浅アサくク
むクんク斯カクてハ筑前チクセンの為タメに悪アクくク徳川トクガハ殿ノ小用心コウウシン

BOOKING

弘化四年丁未七月

備前 湯淺新兵衛元禎 編輯

同藩 平野太郎左衛門敬邁 校訂
赤木益吉周憲

京都 勝村治右衛門

發行書林 大坂 秋田屋太右衛門

江戸 須原屋茂兵衛

發行

書肆

江戸日本橋通二丁目 須原屋茂兵衛

同 淺草茅町二丁目 須原屋伊八

同 日本橋通三丁目 山城屋佐兵衛

同 全所 小林新兵衛

同 芝神明前 岡田屋嘉七

同 本石町十軒店 英大助

同 下谷車改町 和泉屋庄治郎

京寺町通松原 勝村治右門

備中倉敷 太田屋六藏

大塚齋橋通安堂寺町 秋田屋太右衛門

